

記憶の眠る街

多摩市立諏訪中学校 3年 やまざき山崎 はるか遥

路面電車から広島^の街の景色を見たときの印象は、「新しくて、美しい街」であった。高い建物が並び、綺麗な川が流れていた。かつてここに原爆が投下され、荒れ果てた街が広がっていたとは信じられなかった。だが、街の至るところに、その悲惨な記憶が眠っていた。

初日、ガイドの田中さんの案内で平和記念公園を巡った。原爆ドームの前で撮影をするとき、私はついピースをしてしまった。すると、「ここには亡くなった方が眠っているから、ピースは控えよう。」と指摘され、今は公園であるこの場所も、かつて人々が暮らしていたと気がつき、衝撃を受けた。

その後、平和記念資料館を見学した。大火傷で皮膚がむけた赤ちゃんの遺体、地面に焼き付けられた人影、同い年くらいの子が着ていた制服や日記などの写真や遺品を見た。その日記には、必死に前向きに生きる姿、8月6日以降の予定、将来の夢が綴られていた。未来が奪われた、時代が違えば友達だった子を想って、もどかしいような、複雑な感情に襲われた。

翌日、平和記念式典に参列した。交通規制や警備が行われており、デモをする人も見かけた。私は、広島の小学生が「平和への誓い」を読み上げた場面が深く心に残っている。深く訴えかける、はっきりと自分の思いを伝える話し方が、目に、耳に焼き付いている。

その夜、元安川に灯籠流しに行った。川に浮かぶ色とりどりの灯籠は幻想的で、美しさに心を奪われた。だが、原爆が投下されたあの日、この川は遺体で埋め尽くされ、地獄が広がっていたのだということが心に浮かび、「助けて」「水、水」と訴える声が聞こえるような気がして、鳥肌が立った。一方、その賑わいから、原爆の記憶が薄れつつあるのではないかと感じた。

最終日、被爆者の方のお話を聞ける、貴重な体験をした。私達にお話をして下さった伊藤さんは、わずか4歳半のときに原爆を経験し、現在は被爆体験を伝える活動をしている。伊藤さんの家は爆心地から離れていたため、熱線や火災の被害は受けなかったそうだ。しかし、家の近くで亡くなった人々の遺体を焼いた、その鼻をつくような臭いが今でも忘れられないと語ってくれた。思い出したくないはずの辛い記憶を私たちのために伝えてくれた。そのとき、目にうっすら涙を浮かべていたことが、私は忘れられない。

私は、原爆の記憶を自分の肌で感じたい、自分の目で見て学びたいと思いこの活動に参加した。原爆の悲劇を乗り越えた街は美しく、でも、ところどころに眠る悲惨な記憶を目にした。被爆者のお話を聴いて、核兵器をなくす責任が私たちにあると深く感じた。私たちは、平和を望み、当たり前前の日常を信じている。だが、核兵器が溢れる現代、この生活があるのは、単なる「奇跡」なのではないだろうか。また、日本は核兵器禁止条約に参加していないのも事実だ。今の、「核による偽りの平和」から、「真実の平和」を実現するために、私たちは、まず知ること、そして訴えることをしなければならない。私たちの生きる時代に「真実の平和」を実現するために、私たちと共に、一歩踏み出してほしい。